

Vol. 82

## CONTENTS

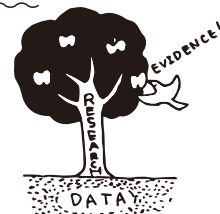
【コラム】IR 業務から見る大学のデータに潜む断層と亀裂とは… 中鉢 直宏

【解説】クリエイティブコンフィデンス醸成に向けたアイデアソン／ハッカソンの活用… 浜田 順子・黒木 昭博

【解説】第2回シンポジウム 2025年度高校教科「情報」入試を考える… 下間 芳樹

## COLUMN

### IR 業務から見る大学のデータに潜む断層と亀裂とは



自分は現在、IR 推進室に所属しています。この IR は Institutional Research（機関調査）の略称で、大学などの教育機関の調査・分析のことです。近年、教育機関において「エビデンス（証拠）」に基づく教育の質保証が求められています。エビデンスとは、客観的な証拠であり、主に数値データがそれにあたります。IR は、エビデンスを収集、分析し、教育機関の状態や成果を目に見える形で提示する業務です。たとえば、本学の場合、授業調査や学修行動調査などの調査を実施し、調査データを基に学生の学修活動の状況や教育環境への満足度などを報告します。また、調査データ以外にも大学にあるさまざまなデータ（以下：大学データ）を収集し、与えられたリサーチ・クエスチョンに対し分析を行ったりします。大学データは、教学関連だけでも、入試データ、学生データ、履修データ、成績データ、進路情報などが挙げられます。

実は IR 業務を行っているとき、この大学データの大きな壁にぶつかります。これを自分は大学データの断層と亀裂と呼んでいます。断層とは、大学データの連続性が切れてしまうことです。大学データにはたびたびこの断層が生じます。カリキュラム変更や学部の統廃合などがこれにあたります。そのたびに業務システムを大きく変更するわけにはいかず、現場の担当部署がテキトウなデータを作成して乗り越えます。ときには同一授業に新カリキュラムと旧カリキュラムで2つの科目コードが割り当てられていたり、管理 ID やコードがテキトウに割り振られていたりします。亀裂とは、学部学科などの組織の縦割りによるデータの分断です。それぞれの組織が現場に最適なシステムを導入し、データ管理をしていたりします。IR 業務として、大学内にあるこれらのデータの所在を把握するだけでも大変です。また大学データ自体が組織単位の発想で作られていたりします。たとえば、学生の学籍番号に学部を表す記号が入っている場合、その学生が学部を転籍すると運用上、同一の学生に2つの学籍番号が付与されます。その時点で学籍番号は学生を特定するユニーク ID ではなくなります。IR 担当者はデータだけで判断したいのですが、これらの問題のたびに、データの素性調べに奔走します。このような大学データの抱える問題を解決するために、個人に IR 用のユニーク ID を付与したり、IR のためにデータを管理する情報システムを構築したりする大学が増えています。それでも解決できないデータが多く存在します。

10年前、大学業務のために作成したデータが遡って分析に二次利用されるなんて想定できた人はいないであろうし、今も少ないと思います。ただ、これは一般にもいえることです。業務で日々生み出しているデータが二次利用されることまで配慮できる現場担当者はまだ少ないと思います。AIなどで既存データが新しい価値を生む時代を迎えるにあたって、IR 担当者の立場を超え、データに関する新しいイテラシーの必要性について考える今日この頃なのです。

中鉢直宏（帝京大学高等教育開発センター IR 推進室）